

英文法の基礎知識

1. 品詞の種類

1) 名詞 (Noun)

「ものの名前を表す」品詞。名詞には、「可算名詞」と「不可算名詞」の2種類がある。

可算名詞は、数えられる名詞のこと。可算名詞には、1つ(単数形)の場合は、a または an、複数形の場合は、s をつける。この s のことを「複数形の s」といい、a または an を「冠詞」という。たとえば、ship は、単数形の a ship (1 艘の船)、複数形の ships (2 艘以上の船) となり、exporter (輸出業者) は、単数形の an exporter (一人の輸出業者)、複数形の exporters (2 人以上の輸出業者) となる。

不可算名詞は、原油 (crude oil)、食物 (food)、機械類 (machinery)、家具 (furniture)、情報 (information)、損害 (damage) などの数えられない名詞のこと。数えられないので、crude oil や food の前に a (an)、後に s をつけることはできない。

辞書には、可算名詞を C (Countable の略)、不可算名詞を U (uncountable の略) という記号で表示している。

a ship 船舶(C)、crude oil 原油(U)

2) 冠詞 (Article)

名詞の前に置かれる品詞。a, an, the.

a や an は、「他にもたくさんあるけれどその中の1つ」という場合に使われる。「たくさんの中の一つ」という意味から、不定冠詞といわれ、後に続く名詞の最初の音が母音の場合には an が使われる。

a ship (1 艘の船)、an exporter (一人の輸出業者)

the は、「それしかない」、「例の」という場合に使われる。不定冠詞と違って、決まったものに使われるので、定冠詞といわれる。

the draft (例の手形)、the sun (太陽) sun や the moon (月) は一つしかないので、必ず the sun, the moon となる。

3) 動詞 (Verb)

「ものの動きや状態を表す」品詞。動詞には、「be 動詞」と「一般動詞」の2種類がある。

be 動詞は、「～である」という意味を表す。

is (～である)

一般動詞は、「売れる」「希望する」といった具体的な動作や状態を表し、自動詞と他動詞がある。

自動詞は、目的語をとらず、主語の動作を表す。sell (～が売れる)、arrive (～が到着する)

他動詞は、目的語をとる。hope (～を希望する)、represent (～を代理する、～を代表する)、sell (～を売る)

4) 形容詞 (Adjective)

「名詞を修飾する」品詞。a major importer (有数の輸入業者) という表現では、major という言葉が、輸入業者の様子を説明しており、輸入業者を修飾している。major (主要な)、expensive (高価な)、irrevocable (取消不能の)、German (ドイツ製の)

5) 副詞 (Adverb)

名詞以外の動詞、形容詞などの品詞を修飾し、さらに、文全体を修飾する品詞。The goods sell well. (その商品は良く売れる。) という文では、well (副詞) は、sell (動詞) を修飾している。The price is very low. (その価格は、大変安い。) という文では、very (副詞) は、low (形容詞) を修飾している。

6) 代名詞 (Pronoun)

日本語の「それ」「あれ」に当たる品詞で、名詞を繰り返さないために使う。it (それ)、he (彼)、she (彼女)、this (これ)、that (それ、あれ)、they (彼ら、彼女ら)

ひと口に「代名詞」と言っても、さまざまな形がある。例えば、「私」に関する代名詞には、I、my、me、mine という4つの形がある。

最初の I は「主格」と呼ばれる形で、「私は」「私が」という意味を持ち、主語の部分に置いて使われる。

2番目の my という形は「所有格」と言って、「私の」という意味になる場合に、名詞の前に置いて使われる。

3番目の me は「目的格」と言って、動詞や前置詞の後ろに置かれ、「私に」「私を」という意味で使われる。

最後の mine は「もの」という意味を含み、「私のもの」という、1つの名詞のように用いることができる。「所有代名詞」という。

代名詞一覧表

| | 主格 (～は) | 所有格 (～の) | 目的格 (～に/を) | 所有代名詞 (～のもの) |
|-----|------------|-------------|---------------|-----------------|
| 一人称 | I (私) | my | me | mine |
| | we (我々) | our | us | ours |
| 二人称 | you (あなた) | your | you | yours |
| | you (あなた達) | your | you | yours |
| 三人称 | he (彼) | his | him | his |
| | she (彼女) | her | her | hers |
| | it (それ) | its | it | its * |

| | | | | |
|--|-----------|--------|------|--------|
| | they (彼ら) | their | them | theirs |
| | Tom | Tom' s | Tom | Tom' s |

*まれにしか使用されない。

7) 助動詞 (Auxiliary verb)

「動詞を助ける」品詞。We can supply you with the goods. (我々はその商品をあなたに供給できる。)の can が助動詞で、supply という動詞の前に置かれ、「供給する」という動作に「できる」という可能の意味を加えている。このように動詞に意味を付け加え、動詞を助けているので、助動詞という。can (～できる)、may (～かもしれない)、shall (～だろう)、will (～だろう)、must (～でなければならない、～にちがいない)

上記の助動詞を一般助動詞というが、その他に be 助動詞、have 助動詞、do 助動詞がある。

8) 疑問詞 (Interrogative)

「どこ」や「いつ」のように、「何らかの情報を尋ねる場合に使う」品詞。例えば、Where do you buy it?(あなたはどこでそれを買いますか)という文の where という疑問詞を使い、「どこ」という場所に関する情報を問いかけるような場合に用いられる。where (どこに、どこへ、どこで)、when (いつ)、what (何)、how (どのように)、which (どの)

9) 前置詞 (Preposition)

「名詞の前に置かれ、場所や時などを表す働きをする」品詞。例えば、We produce it in our factory. (我々は、それを我々の工場で製造する。)の in が前置詞で、「我々の工場で」というように場所を表す働きをしている。「前置詞+名詞」は、形容詞や副詞の働きをすることもでき、これを形容詞句または副詞句という。

形容詞句の例：The goods are of use. (その商品は役にたつ。)、the goods in question (問題の商品)

副詞句の例：by sea (船便で)、at your end (そちらで、そちらに)

10) 接続詞 (Conjunction)

「言葉と言葉を接続する」ために用いられる品詞。import and export(輸入と輸出)の and(～と)という接続詞が、import と export という2つの名詞をつなぐ役割を果たしている。例えば、When we attended the International Trade Fair, we saw a very interesting merchandize. (我々が国際見本市を参観した時、大変面白い商品を見た。)の when(～するとき)という接続詞は、コンマではさまれた2つの文と文をつなぐ働きをしている。このように接続詞は、さまざまなものをつなぐ働きをする。and(～と)、when(～するとき)、because(～だから)、as(～なので)、that(～ということ) whether / if(～かどうか)

2. 基本的な文法用語

1) 主語

主語は、「～が」「～は」に当たる言葉で、文の先頭に置かれる。英語で主語になるのは、「名詞」「名詞句」など、名詞の働きをする要素のみ。主語は、S (Subject) という記号を使って表す。

2) 述語

述語は、「～する」「～である」に当たる言葉で、主語の直後に置かれる。述語の部分には、原則として動詞が使われる。述語は、V (Verb) という記号を使って表す。

3) 修飾する

「修飾する」というのは、「形容詞が名詞を飾ったり、副詞が動詞やさまざまな品詞を飾ったりする」こと。英文法では、この「飾る」ことを「修飾する」(qualify) という言葉を使って表す。

4) 語／句／節／文

語は、1語の単語のことで、例えば、commerce (商業) は、1単語なので語になる。

句は、2語以上の単語から成る言葉のこと。名詞句、形容詞句、副詞句がある。例えば、international trade (国際貿易) は、名詞の働きをするので、「名詞句」という。the goods in question (問題の商品) の in question (問題の) は、形容詞の働きをするので、形容詞句という。We send you the goods by sea. (我々は、その商品を船便で送る。) の by sea (船便で) は、副詞の働きをするので、副詞句という。

節は、主語と述語でできているひとかたまりの言葉のこと。We hope that you give us your special payment terms. (我々はあなたが我々に特別の支払条件を与えることを希望する。) は、一つの「文」であるが、この文の中には、We hope という主語・述語のかたまりと you give us your special payment terms という主語・述語のかたまりがある。この二つのかたまりは、それぞれ「節」に当たる。

文は、大文字の言葉で始まり、ピリオドが打たれるまでのすべてを指す。これまで出てきた上記のピリオドで終わっている言葉のあつまりが文に当たる。

5) 文の種類

肯定文は、「～である」「～する」という意味を持つ文のこと。We are leading importers in Japan. (当社は、日本における大手の輸入業者です。)、We look forward to your reply. (御社のご返事をお待ちします。)

否定文は、「～しない」「～でない」という、肯定を打ち消す文のこと。These goods are not expensive. (これらの商品は、高くない。)、Our order has not yet reached us. (当社の注文品はまだ到着していません。)

疑問文は、「～しますか」「～ですか」と問いかける文のこと。Do you want to buy it? (あなたはそれを買いたいですか?)、What do you want to buy? (あなたは何を買いたいですか?)

6) 述語動詞と準動詞

(1) 述語動詞

主語がついている文を作る動詞。We attend the International Trade Fair. (我々は国際見本市を参観する。)

(2) 準動詞

不定詞、動名詞、分詞、分詞構文のことをまとめて準動詞という。これらは、動詞の形をいろいろと変化させることによって、動詞以外のさまざまな品詞の働きさせることができる。

①不定詞は、動詞を to V という形に変え、名詞や形容詞や副詞の働きをさせることができる。

・名詞の働き It is mutually beneficial for us to start business as soon as possible. (早急に取引を開始することはお互いに有益です。)

・形容詞の働き This is the cargo to ship by the end of October. (これは、10月末までに船積みすべき貨物です。)

・副詞の働き We are writing to draw your attention to our order. (当社の注文への注意を促すために手紙を書いています。)

②動名詞は、動詞を Ving という形に変え、名詞の働きさせることができる。We would appreciate your sending us a sample of this merchandise. (この商品のサンプルをお送りいただければ幸甚です。)

③分詞は、動詞を現在分詞や過去分詞という形に変え、形容詞の働きをさせることができる。

・現在分詞 Please let us know the shipping schedule. (船積予定をお知らせください。)

・過去分詞 The goods must be sent to the address indicated in the enclosed order sheet. (商品は、同封の注文書に指示されている住所に送られなければならない。)

④分詞構文は、動詞を現在分詞や過去分詞に変え、副詞の働きをさせることができる。

Knowing the story, I could not enjoy the movie. (話を知っていたので、私は、映画を楽しめなかった。)(能動態分詞構文)、Damaged by the storm, the bridge is not usable. (嵐による被害で橋は使い物にならない。)(受動態分詞構文)

3. 文の要素と5文型

英語の文では、語順が極めて重要である。英語の語順の基本パターンは、5つあり、これを「5文型」という。

まず、英語の5文型を理解するうえで文を構成する要素をおさえておこう。文の要素とは、文型を構成する主語(S)・動詞(V)・目的語(O)・補語(C)の4つの要素のこと。

| | |
|--------|-----------------------|
| 主語(S) | 「～は」「～が」にあたる語 |
| 動詞(V) | 「～である」「～する」にあたる語 |
| 目的語(O) | 「～を」「～に」にあたる語 |
| 補語(C) | 動詞の意味を補い、主語や目的語を説明する語 |

英語のほとんどの文は、上記の4要素の組み合わせで次の5つの文型に分類することができる。

| | |
|-------|----------------------|
| ①SV | (主語 + 動詞) |
| ②SVC | (主語 + 動詞 + 補語) |
| ③SVO | (主語 + 動詞 + 目的語) |
| ④SVOC | (主語 + 動詞 + 目的語 + 補語) |

(注) 主語: Subject (S) 動詞: Verb (V) 補語: complement (C) 目的語: object (O)

複雑な長い英文でも、基本的には上の5文型のどれかにあてはまり、そこに修飾語句がついたもの。(ただし、5文型にあてはめにくい There is ～. や It is … to ～. のような特殊な文型もある。)

英語では、主語と動詞のあとにどの要素をどういう順序で並べるかということが、5つのパターンに集約される。それぞれの文型は、下記の通り。

①SVの文型は、主語と動詞からなる文で、ほとんどの文は、動詞の後ろに副詞などの修飾語を伴う。修飾語は文の要素には含まれない。

It sells well. (それはよく売れています。)

S V 修飾語 (sells を修飾)

②SVCの文型は、主語、動詞、補語からなる文のことで、この文では、「主語＝補語」の関係が成り立つ。代表的な動詞はbe動詞。

He is an exporter of petrochemicals. (彼は石油化学品の輸出業者です。) <He=an exporter の関係>

S V C 修飾語句(an exporter を修飾)

③SVOの文型は、主語、動詞、目的語からなる文のことで、目的語は動詞のあとに置かれる。

He imports the products from the United States. (彼は米国からその製品を輸入しています。)

S V O 修飾語句(imports を修飾)

He thinks (that) English is interesting. (彼は英語はおもしろいと思っています。)

S V O (名詞の働きをする節)

④SV00の文型は、主語と動詞のあとに「～(人)に」「…(物)を」の2つの目的語がくる文。

I showed her the picture. (私は彼女にその写真を見せました。)
S V O O

⑤SVOCの文型は、主語と動詞のあとに目的語と補語がくる文で、この文では、「目的語＝補語」の関係が成り立つ。

We call him John. (私たちは彼をジョンと呼びます。) <him = Johnの関係>
S V O C

4. 関係代名詞

1) 関係代名詞の主格

「関係代名詞 + 動詞」が直前の先行詞を修飾する。

●例文

①Among other things, you'd locate an agent who would sell your product. (とりわけ、御社の製品を販売する代理店を探し出すことでしょう。)

②A quota is a limit on the goods that go into a country. (割当は、ある国に入ってくる商品を制限することです。)

関係代名詞とは、名詞の後ろに節を使った修飾部分を置くときに「つなぎの言葉」として使われる who, which, that などの言葉のことを言う。

関係代名詞の主格の後ろには、動詞が置かれ、「関係代名詞 + 動詞」という形で、直前の名詞を修飾・説明する。

なお、関係代名詞を使って説明される直前の名詞のことを「先行詞」と言う。

例文①では、who would sell your product. という「関係代名詞 + 動詞」の部分が直前の an agent という先行詞を修飾している。

また、例文②では、that go into a country という「関係代名詞 + 動詞」の部分が直前の the goods という先行詞を修飾している。

●who / which / that

関係代名詞の主格の用法では、先行詞が人間を表す場合は「who + 動詞」の形を使い、先行詞が物の場合は「which + 動詞」の形を使う。

who, which どちらの関係代名詞も that に置き換えることができる。

また、関係代名詞の直後の動詞の形は、先行詞に合わせなければならない。

例えば、先行詞が三人称単数の名詞であるならば、関係代名詞の直後の動詞には、当然、三単現の s を付けなければならない。

2) 関係代名詞の所有格

先行詞が物でも人でも whose

●例文

①Did you see the exporter whose products had been well received in the US? (あなたは製品が米国で好評を博した輸出業者に会いましたか。)

②The building whose solar cell you can see over there has been constructed by our company. (あそこに太陽電池が見えるビルはわが社が建設したものだ。)

関係代名詞の所有格は、先行詞が持っているもの、つまり所有物を修飾・説明したい場合に使われる。

所有格の関係代名詞は、先行詞が物でも人でも whose となる。

まず、関係代名詞 whose の後ろに先行詞の所有物を置く。

例文①では、先行詞の the exporter(輸出業者)の所有物である products(製品)、例文②では、先行詞の the building(ビル)の所有物である solar cell (太陽電池)が置かれてる。

所有物の後ろには、直後に動詞を置いたり、主語・述語の節を置いたりすることができる。

例文②では、you can see over there というように節が置かれている。この場合の節は他動詞や前置詞の後ろで目的語が抜けた、不完全な文でなくてはならない。

3) 関係代名詞の目的格

目的語が抜けている不完全な文になる。

●例文

①That is the man (whom [that]) we respect very much. (あれは、私たちが大変尊敬している男性だ。)

②Did you bring the pictures (which [that]) you took yesterday? (昨日あなたが撮った写真を持ってきましたか。)

目的格の関係代名詞の直後には節が置かれるが、先ず第1のルールとして、この節は必ず、他動詞や前置詞の目的語が抜けている不完全な文でなければならない。

例文①で、関係代名詞の後ろにある節では、respect という他動詞が使われている。しかし、respect という他動詞の後ろには目的語がない。つまり、この文は不完全な文である。

第2のルールは、このような名詞が抜けている個所に先行詞を挿入すると完全な文になるということである。

例文①の先行詞を目的語が抜けている個所に入れると、we respect the man very much. という正しい文が完成する。

例文②でも、目的格の関係代名詞の後ろを見ると、took という他動詞の後ろは目的語が抜けている。

ここに、先行詞の the pictures を挿入すると、You took the pictures yesterday. という完全な文が成立する。

関係代名詞の目的格を使った文では、必ずこうした2つのルールが成立しなければならない。

目的格の関係代名詞は、先行詞が「人」の場合 whom、「物」の場合 which であるが、多くの場合、これらは省略される。

口語では目的格の関係代名詞はほとんど省略され、省略しない場合にも that（「人」および「物」の双方に使用）を使うのがより自然な英語とされている。

ただ、関係代名詞が省略されても、2つのルールは変わらないので、省略を見抜き、そこに関係代名詞を補って考えるようにする。

4) 基本的な関係副詞

直前の先行詞を修飾・説明する。

●例文

①This is the spot where he had the accident yesterday. (ここは彼が昨日事故に遭った場所だ。)

②Do you know the reason why she was absent? (あなたは、彼女が欠席した理由を知っていますか。)

関係副詞は、関係代名詞と同じように、後ろに節を置いて直前の先行詞を修飾・説明することができる。

関係副詞には where、when、why などがあり、先行詞によって使い分けられる。

関係代名詞と異なるのは、関係副詞の直後には必ず「完全な文」が置かれなければならないことである。

例文①では、where の後ろの文には他動詞や前置詞の目的語が抜けているところはなく、完全な文が続いているのがわかる。

関係副詞は、先行詞が「場所」の場合は where を、「時」の場合は when を使う。

ただ、where の前の先行詞が the place(場所)であったり、when の前の先行詞が the time(時)であったりする場合、わかりきっている先行詞を省略することがよくある。

例文①では、「場所」とわかりきっている the spot を省略して、This is where he had the accident yesterday. となることがある。

例文②のように、先行詞が the reason(理由)の場合には、why という関係副詞を使う。

この why を使う場合は、先行詞の the reason を省略しても、関係副詞の why を省略してもかまわない。

例文②は、Do you know the reason she was absent? や Do you know why she was absent? と書き換えることができる。